



向かいの席で、おしゃべりしながら食べている生徒たち。給食のタンパク質やビタミン、カルシウムなど、栄養豊富な食事を食べています。



給食のタンパク質やビタミン、カルシウムなど、栄養豊富な食事を食べています。

市政トピックス

それぞれの思いを胸に「聖火ランナーが駆け抜けました」

6月21日、県内3日目となる東京2020オリンピック聖火リレーが本市で行われ、49人のランナーが走り抜けました。当初、沿岸部と中心部の2つのコースを予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中心部での聖火リレーを中止し、仙台市陸上競技場での走行に変更になりました。



陸上競技場に設置されたステージに立つグループランナーの皆さん

桜の花をモチーフにデザインされた聖火皿。素材の一部には、東日本大震災の復興仮設住宅の廃材が使用されています

沿岸部のコースでは、東日本大震災からの復興の歩みを発信する意味を込めて、震災遺構仙台市立荒浜小学校からスタート。貞山堀沿いに整備されたサイクリングロード「仙台巨理自転車道」では自らがトラックを一周するよう、聖火をつなぎました。将来、オリンピックやパラリンピックを目指すアスリートなどによるグループランナーが聖火皿に点火し、次の静岡県に引き継がれました。

市政トピックス

復興とコロナ収束への願い「青葉まつり代替イベント開催」

新型コロナウイルス感染拡大のため2年連続で中止になった仙台・青葉まつりの代替イベント「復興提灯と山鉾展示」が、6月



青葉まつりの時に山鉾を先導する木遣り

24日から27日まで開催されました。このイベントは、東日本大震災からのさらなる復興と新型コロナウイルス感染拡大の収束を願うとともに、医療従事者などへの感謝の気持ちを表すことを目的に実施されたものです。

サンモール一番町商店街には山鉾3基を展示したほか、山鉾の紹介パネルや青葉まつりの映像を上映。山鉾には、青葉まつりの再開などを願うメッセージが掲示され、まち行く人が足を止め、熱心に見入っていました。また、定禅寺通緑地には、高さ約5メートルの伊達門と130個のちょうちんでつくる復興提灯を設置。初日には、伊達門の明かりをともし「火入れ式」が行われました。「伊達木遣り会」が木遣り唄を披露し、力強い歌声が夜空に響きました。代替イベントは、秋に第2弾として「仙台すずめ踊り秋舞」を開催予定です。

市政トピックス

生出小学校赤石分校の閉校式が行われました

生出小学校赤石分校の閉校式が7月4日に行われ、生出小学校の全児童58人のほか、地区の住民の方など合わせて149人が出席しました。

生出小学校赤石分校は明治21年に開校。昭和35年には、最多の126人の児童が通っていましたが、年々児童数が減少し、平成27年度に在籍児童がいなくなったため休校となりました。地域の方々と赤石分校の今後について協議を重ね、今年3月末に133年の歴史に幕を閉じることとなりました。



6年生が1人ずつ感謝の言葉を話しました

閉校式では、石垣恵校長が地域の方々などへの感謝の気持ちを述べた後、6年生の丹野紗奈さんが「これからも赤石分校は地域の人を守り、つなぐ場になってほしい」と話しました。参加者たちは、閉校を惜しみながら赤石分校での思い出を胸に刻んでいました。

市政トピックス

給食に「宇和島産養殖マダイ」を使った献立が登場

7月1日から21日にかけて市立小・中学校で「宇和島産養殖マダイ」を使用した給食が提供されました。これは、新型コロナウイルス感染症の影響で販路を失った国産農林水産物等の販路の多様化に向けた取り組みを支援する、国の制度を活用したものです。本市の歴史姉妹都市である宇和島市より、特産物である養殖マダイが学校給食用食材として届けられました。

7月1日に大和小学校で出されたメニューは「マダイの南蛮漬け」。4年1組では、初めに担任教師からマダイの養殖の方法や、結婚式などが集まる機会が少なく、出荷量が減少していることなどについて写真を用いて説明

市政トピックス

避難所用「多言語指さしボード」を作成

近年、増加している外国人住民と、避難所で円滑な意思疎通を図るため、市では「多言語指さしボード」を作成しました。これは、災害発生時に、外国人と避難所スタッフが互いにボードに記載された文章やイラストを指差しすることでコミュニケーションを図るものです。



避難所スタッフ用と外国人用、2種類があり、日本語に不慣れた外国人等にも分かりやすい「やさしい日本語」や英語、中国語など15言語に対応。避難所の使い方や健康状態、食べられないものなどさまざまな場面が想定され、細やかな意思疎通が可能となりました。「多言語指さしボード」は市内の指定避難所等に備え、活用を図っていきます。

3.11 震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

「春の消息」



柳美里・佐藤弘夫 著 尖戸清孝 写真 第三文明社 刊

なにげない日々の暮らしが、突然災害に見舞われ、思ってもみなかった生活を余儀なくされるという体験を、この東日本大震災で知りました。朝、元気に家を出た人、気のいい近所のオバちゃんなどなど、数え切れない別れがありました。ラジオから流れた「十何メートルの津波が押し寄せ、浜には何百という遺体」という信じられないニュースに嘔然としました。

あまりに突然すぎる別れに遭遇した人たちは、堂や社を訪ね、祖先や死者と語り合うことで、心の安らぎを得られるのかもしれない。現代という時代から遠ざけられている死の世界。東北の霊場に今に続く生者と死者交歓の儀式は、死者と寄り添うことで、自分が無数の生命のつながりの中、大きな世界で生きていくことに気付かせてくれます。

「三陸海岸大津波」



吉村昭 著 文藝春秋 刊

著者が津波に関わることになった動機として、ある老婦人が語った体験が紹介されています。深夜に逃げる途中、二階家の屋根の上にそそり立つように現れた津波が、キバをむいて襲いかかる化け物に見え恐ろしかったということ。もともとこの三陸一帯は震災による津波が多く、リアス式海岸ということもあって、避難も容易ではありませんでした。明治29年の震災のころから、詳細に記録されるようになり、当時の様子を語り残してくれた先人たちの証言の数々は、後世の私たちに多くの教訓を残してくれました。

紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585